

◆2021年3月第4週の説教

■日時：2021年3月28日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「本当に、この人は神の子だった。」

■聖書：マルコによる福音書第15章21-47節

■讃美歌：21-311「血しおしたたる」、21-313「愛するイエス」

お早うございます。

受難週第6主日、棕櫚の主日を迎えました。

棕櫚と言うのはナツメヤシのことです。

古代において、棕櫚は勝利の象徴でした。

イエス様が最後の1週間を過ごされるエルサレムに入城される時、人々は棕櫚の枝を手にもって迎えました。

覚えていらっしゃいますか？

「ホサナ。

主の名によって来られる方に、

祝福があるように。

我らの父ダビデの来るべき国に、

祝福があるように。

いと高きところにホサナ。」（マルコによる福音書11:9-10、p84）と言う歓迎の叫びを。

今日と言う日は、人々がイエス様を出迎えた日であり、教会の暦では、今日から始まり、イエス様が十字架に架けられ、復活する前日の土曜日までを受難週として覚えます。

それでは、21節から見てまいりましょう。

21：そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。

シモンと言う名のキレネ人が登場します。

彼は、朝早くから農作業をしていて、それが終わり、帰路に着いていたのかも知れません。

すると、その時、処刑場へと向かわせられているイエス様に出会います。

ピラトから死刑の判決を受けたイエス様は、その後、兵士たちによって鞭打たれ、叩かれ、唾を吐きかけられ、狼藉の限りを尽くされていました。

死刑の判決を受けた者は、自分が架けられる十字架の横木を自ら運ばねばなりません。

しかし、酷く打ち叩かれたイエス様に、十字架を負って歩む力は残っていなかったのでしょう、たまたま通りかかったシモンが、ローマ兵によってその場で徴用され、イエス様の後に従い、代わって十字架を運ばねばなりませんでした。

22 節。

22：そして、イエスをゴルゴタという所—その意味は「されこうべの場所」—に連れて行った。

ゴルゴタはアラム語で、ラテン語ではカルバリと言います。研究者によれば、ゴルゴタはエルサレムのやや北にある丘で、丘の斜面に露出した岩にいろいろ穴が開き、それが頭蓋骨のように見えたのではないかと言うことです。

そして 23 節です。

23：没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。

十字架に着けると言うことは、両手両足を釘で木に打ち付けることです。

耐え難い激痛が襲うため、兵士たちは没薬を混ぜたぶどう酒、即ち一種の麻酔の機能を持つものを飲ませようとしていました。しかし、イエス様はそれを受け取らず、激痛に身を任せ

ることを選びました。神様の意思に従う道に、たとえ善意であれ、他者の介入を受け入れることは出来ないのです。そこには、神様と、その意思に従う者との、2人だけの峻厳な関わりしか見出すことは出来ません。

24-26 節。

24：それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、その服を分け合った、だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。

25：イエスを十字架につけたのは、午前9時であった。

26：罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。

死刑囚が着ていた服を刑の執行者が分け合うことは、慣習で許されていました。当時、布地は貴重なものであったからです。

そして、午前6時から数えて第3時、即ち午前9時にイエス様は十字架に架けられます。その罪状書きには、「ユダヤ人の王」と記されていました。ピラトのもとにおいて死刑の理由とされたのは、恐らくローマ帝国に対する反逆と騒乱を扇動したとの理由であったと思われる。

27 節から 32 節。

27：また、イエスと一緒に2人の強盗を、1人は右にもう1人は左に、十字架につけた。

28：略

29：そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、3日で建てる者、

30：十字架から降りて自分を救ってみろ。

31：同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒にあって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。

32：メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

兵士たちに続いて、十字架の前を通りかかった者、祭司長、律法学者、そして犯罪人として同じように十字架にかけられた者たちまでもが、イエス様を罵ります。

イエス様は、十字架を取り囲む人々全ての敵意と嘲りの内に置かれ、肉体的にも精神的にも打ち砕かれます。そして、いよいよ最期の時が訪れます。

33 節から 37 節。

33：昼の 12 時になると、全地は暗くなり、それが 3 時まで続いた。

34：3 時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。

35：そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。

36：ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。

37：しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」。

人として、これ以上の絶望の叫びはないのです。

イエス様は、あのゲッセマネの園の 3 度に及ぶ祈りによって、苦しみの杯である十字架は取り除けられないことを知らされます。即ち、この十字架において苦しみ、そして死ぬことが、神様の意思であることをです。

しかし、己が全てを神様の御手に委ねつつも、死を迎え入れること、それは自分の肉体の滅びを受け入れることであり、己の肉体も精神もその全てが死に支配されることを認めることでした。

肉体の耐え難い苦痛、しかしそれ以上に、神様から見捨てられることへの精神的な苦しみ、その思いこそが「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」の絶望の叫びでした。

恐らく、日頃唱えていた旧約聖書詩編 22 編 1 節のこの句が、イエス様の最期の言葉として記録されています。さらに、何を語られたか分かりませんが、37 節では大声を出され、息を引き取られました。死との闘いは終わり、死が勝利したのです。

しかし、その時です。マルコは、イエス様の十字架の死によって、二つの出来事が起きたことを証言しています。

38、39 節です、

38：すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

39：百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けたこと、これには重大な意味がありました。それは、祭司以外の者、取り分け異邦人には入ることが許されなかった神殿の最も奥の部屋である至聖所、そこは神様が現臨する特別な場所でしたが、その部屋に至る隔ての垂れ幕が打ち破られ、その場所が全ての人に解放されたことです。そしてこのことは同時に、イエス様の死において、全ての人々の罪の贖いが成し遂げられ、神殿で行われていた罪の赦しに関わるあらゆる祭儀の意味が無くなり、神殿の役割の終わりを告げるものであったからです。

続いて 39 節ですが、お気づきですか？

このローマ軍の百人隊長は、イエス様の処刑を指揮する現場責任者でした。

言うなれば、イエス様を十字架に着けて殺した張本人が、「本当に、この人は神の子だった」との信仰を告白したのです。

そう言えば、マルコの第 12 章 28-34 節において、「あなたは神の国から遠くない」と賞賛されたのは、イエス様の敵対勢力である律法学者の一人でした。

愛する弟子たちが一人として残らず逃げ去り、神様からも見捨てられたイエス様は、その絶望的な死によってこそまさに、ユダヤ人か異邦人であるかを問わず、全ての人に罪の贖いの道を拓き、敵であった者にさえ信仰の告白を導きます。

イザヤ書第 53 章 5 節の御言葉が心を打ちます。

5 : 彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり

彼が打ち砕かれたのは

わたしたちの咎のためであった。

彼の受けた懲らしめによって

わたしたちに平和が与えられ

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

40 節、41 節です。

40 : また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。

41 : この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

それでも、イエス様には慰めがありました。一群の女性たちが、イエス様を見捨てることなく、遠くからであっても見守っていたと言うのです。

今日与えられた最後の御言葉、42 節から 47 節です。

42 : 既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、

43：アリマタヤ出身で、身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいた
のである。

44：ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。

45：そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。

46：ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。

47：マグダラのマリアと、ヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。

ここに登場する「身分の高い議員ヨセフ」とは、最高法院のメンバーの一人であり、イエス様を十字架に着けた祭司長、律法学者と同じ立場にいた者でした。ここでも又、イエス様の敵対勢力の一人が、イエス様の葬りの労を取ります。

ピラトに引き取りを申し出るのに、どれほどの勇気が必要だったことでしょうか？

一步間違えば、重罪人として処刑されたイエス様の仲間ではないかと疑われるのが目に見えています。しかし、彼は勇気をふるって、イエス様の遺体を引き取ることをピラトに願います。神の国の到来を真実に待ち望む者として、イエス様が語られた言葉、人々になされた業の一つひとつに、心を寄せずにはいられなかったからです。

通常、十字架に架けられてから絶命するまでは、24時間以上かかることもまれではありませんでした。苦しみ抜くことを極限まで味わわせるための十字架刑であり、最も残酷な処刑方法であったからです。しかし、イエス様は、十字架に着けられてから6時間で絶命します。死に至るまでの時間があまりにも早かったため、ピラトは、イエス様が本当に死んだかどうかを確かめずにはいられませんでした。

夕方になり、間もなく安息日が始まります。安息日が始まる前に、死刑囚の遺体は処理を

済ませておかなければならないことが掟で定められていました。ヨセフは亜麻布を買います。時間はなく、塗るべき香油を塗らないまま遺体を亜麻布で包み、自分のために用意しておいた墓に葬るのです。

マグダラのマリアとヨセの母マリアは、それを見つめていました。

イエス様がどこに葬られるのかを見届けるためでした。

今日、イエス様はエルサレムに入城され、最後の晚餐を終えた木曜日の夜の闇の中で捕らえられ、金曜日の明9時に十字架に架けられます。

その苦しみは、一体何のためであり、誰のためのものであったのかを、繰り返し繰り返し問いつつ、心に覚え続ける日々でありたいと思います。

祈りましょう。